

令和7年度マイスター・ハイスクール事業 成果発表会 講評シート

学校名(仙台市立仙台工業高等学校)

1. 取組についての評価

- ・企業と連携した実践的学びが、生徒の学力・社会力の向上、誇りと向上心の醸成に結び付いている
学んだことが役に立つ実感・世間に認められた体験が、技術力+コミュニケーション力+主体性の育成 につながる
本物との対話 → 働くことへの自己肯定感 → 地域貢献意識の向上 → 夢は叶う実感 につながる
- ・なかなかできない「何のために」の見直しと再構築:勇気あるAction を行っている
地域企業との連携の意図を再確認する校内ワークショップ自体が、素晴らしい「風土づくり」
「何のために」=生徒が誇りを持てる学校作り
教員が学び合い、成長を実感できる仕組み作り
- ・都市型工業高校としての「情報科」の立ち上げ
都市における「工業としての情報科」の到達目標を明確に【グラディエーション・ポリシー】を作成している
それに向けた【カリキュラム・ポリシー】として、企業との連携がある
そのマイルストーンが、プログラミング・情報リテラシー・IoT活用・ネットワーク構築、と捉えている
- ・各学科の取組も魅力的であるが、とりわけ組織改革に積極的に取り組まれている点が参考になる。様々な取組を学校全体のものとしていくためには、教員間の関係性の強化が鍵となり、自由に意見を言える雰囲気づくりが組織改革につながると考えられる。学校としてどこを目指すのかを明確にするためのワークショップは、教員一人一人の意識改革にもつながる取組であると思われる。

2. 今後の課題と考えられること

- ・「何のために」が出来たので「何を」到達目標にするのかの検討ができるの良い
専門高校のプライド【仙台工業プライド】=普通科には出来ない技術を伴った知識の修得
例えば、建築科ではBIM・耐震免振、機械科ではロボット・5軸制御MC、
電気科ではセンサー・アクチュエータ・太陽光発電の長寿命化、
土木科ではコンクリート・ドローン活用測量、情報科ではIoT活用・ITソリューション・AI部活動、などが考えられる
- ・「どのように」仕掛けるか【カリキュラム・ポリシー】の具体化
到達目標を具体的に定める → 一年次にその姿を産業実務家教員が見せる
意欲の持続には計画的な刺激が必要 → 講演・先端現場研修・修得型インターンシップなど
3年次の課題研究で、技術を伴った知識の飛躍的な向上を図る(2~3年次継続も検討)
- ・コンソーシアムとの共通理解と協働実践を実現するには、教育委員会の伴走支援が不可欠
市教育委員会が市産業振興部局との橋渡し役を担えば、コンソーシアムの充実と市議会での理解が得やすい
それが市民・県民の理解につながる
- ・生徒や教職員が、自身や組織の変容、達成感などを互いに共有できる機会として、学科合同での成果発表会等を企画することも有効ではないかと考えられる(既に実施されている場合は、そうした取組のさらなる充実が期待される)。